広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	研究室の星野先生 ： 星野一郎先生を偲ぶ
Author(s)	手塚, 貴大
Citation	広島大学マネジメント研究 , 21 : 8 - 9
Issue Date	2020-03-26
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048988
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	

研究室の星野先生
― 星野一郎先生を偲ぶ ―

広島大学法学部教授　手　塚　貴　大

広島大学教授・星野一郎先生が2019年９月14日にお亡くなりになられた。月並みな表現ではあるが，63歳というあまりにも若すぎる死は，私にとって悲しみの極みであり，いまだに信じられない気持ちである。星野先生の訃報は出張中の会議において，スマートフォンで広島大学の教職員ポータルサイト“いろは”を何気なく見た際に，葬儀連絡の欄を閲覧して知るところとなった。しばし茫然としたことをはっきりと覚えている。星野先生と最後にお目にかかったのは９月初旬の社会科学研究科教授会であったと記憶しているが，その際にも，会議にノートパソコンを持ち込み，締め切りに追われつつ，ご論文を元気に執筆しておられた。それから，わずか10日ばかり後に，お亡くなりになられたことになる。星野先生の生前お付き合いのあった者として，星野先生との思い出を頭に浮かべつつ，この追悼文を書かせていただく。

私は2004年４月に広島大学に着任したが，星野先生と私は勤務するキャンパスが異なり，西条の法学部・経済学部棟でもお目にかかることはなく，当初面識はまったくなかった。記憶が定かではないが，確か2004年の暮れまたは2005年の年頭のころであったように思うが，私の親しくさせていただいていた同僚の研究室で偶然お目にかかり，そこから星野先生との交わりははじまったように思う。初対面の際にも，大変気さくで，とても明るい方という印象を持ったことを覚えている。そこで，私も東千田キャンパスで夜間主コースの授業を担当する際，思い切って授業の前後に星野先生の研究室に立ち寄ってみると，多忙な方であるにも拘わらず，大変歓迎してくださった。それから後，折に触れ，先生の研究室にて雑談を交わすようになったのであった。そのときの会話の内容に係る詳細は伏せるが，いわゆる生臭い内容のものは一切なく，世間話・雑談に尽きていたように記憶している。とはいえ，星野先生のとの会話は私にとって色々な意味で教科書そのものであった。というのも，その当時，私は30歳にもならない身であり，世間からすれば遅く就職したこともあろう，世間知らずで，社会性もなかった。一方，その当時星野先生は年齢的には中堅でありながら，既に広島大学副理事，社会科学研究科マネジメント専攻長の要職を勤められていた。星野先生は，大変有能であられたため，要職もそつなくこなされ，大学執行部の多くの方から頼りにされておられた。それだからこそ人生経験豊富であった。例えば，大学内の色々な場面で難しい問題に直面した時にはどのように対処すればよいか，人から言われたことをどのように受け止めればよいか，苦手な人物との付き合い方，研究のこと，私生活のこと等，星野先生に相談をさせていただいたことは多かったが，そのご教示は私の大学教員・社会人としての基盤となっている。しかも，星野先生は研究室での会話の中では終始星野先生らしいユーモアを以て語っておられたけれども，私からの真剣な問いかけには，一変して真摯に対応してくださり，何より星野先生よりいただいたアドバイスは的確そのものであった。そして，その中で感じることは，星野先生の頭の切れの鋭さ，誠実さ，やさしさであった。つまり星野先生は私が躊躇することなく弱みを見せられる数少ない方であったわけであって，それは星野先生のお人柄に依るところ大であった。また星野先生はご自身にとって困難なことを笑いに変える度量，懐の深さをもお持ちであった。そのようにお話しをさせていただいて，何度勇気づけられたか分からない。実のところ，そうした思いを持っている同僚は多いはずで，私の所属する法学部にも“隠れ星野一郎ファン”は少なからずいると想像する。

また，星野先生は研究能力も大変高く，多数の著書，論文を執筆してこられたことは多くの者の知るところであり，会計学の領域でも大変評価の高い学者であったと漏れ伺っている。研究室にうかがった際に，これから出版する予定の複数冊の浩瀚な著書草稿を見せてくださった。それは会計学の研究書は勿論のこと，教科書，さらには社会科学系の論文執筆方法論にまで及び，星野先生の充実した研究・教育活動

が見て取れるものであった。これからも，まだまだ研究への意欲を失わず，その能力もお持ちだったが，お亡くなりなられたことで研究継続はできなくなってしまった。しかし，星野先生の数々の貴重なご業績は決して消えることはなく，ずっとこれからも学界を中心に参照され続けていくはずである。

東千田キャンパスに来る際には，立ち寄ることがとりわけ最近では習慣となっていた星野先生の研究室でお話しをさせていただくことももうできない。実は今も星野先生のご意見を拝聴したいことはあるし，これからもそうしたことは出てくるであろう。私が東千田キャンパスに行く際にはほとんどいつも先生の研究室に明かりがついていたが，今は暗く静かである。今でも明かりのつかない星野先生の研究室の扉を見ると忍び難い寂しさを禁じ得ないが，優しいご尊顔の記憶も，そしていただいた数々のお言葉も私の中で生きている。星野先生は終始明るく，前向きな方であったので，私もできるだけ星野先生に倣いたいと思う。そして，これからも，難しいことに直面したら，“星野先生だったらどのように考え，どのように対応するか”と必ず思うであろう。それがいただいたご厚情に対する私なりのお礼である。

星野先生のご冥福を心よりお祈りいたします。生前におきまして色々とご指導・ご鞭撻をくださり，本当にありがとうございました。